

トルコ語を母語とする日本語学習者の受動文習得の研究

教科・領域教育専攻
言語系(国語)コース
安田 春子

指導教員 小野 由美子

論文要旨

1. 研究の目的

本研究の目的は、トルコ語を母語とする日本語学習者(以下トルコ人日本語学習者とする)の受動文習得の状況を探り、その習得を助ける、または妨げる要因が何かを解明することである。また、その要因を明らかにすることにより、トルコ人日本語学習者を対象としたより効果的な受動文単元の開発を意図している。

2. 論文構成

本研究は序章から結章までの5章で構成する。

目次

序章 研究の目的と方法

第1章 先行研究の分析

第1節 受動文に関する先行研究

第2節 受動文習得に関する先行研究

第3節 課題の設定

第2章 日本語母語話者に対する

アンケート調査の分析

第1節 調査の概要

第2節 結果と考察

第3節 課題の設定

第3章 トルコ人日本語学習者に対する

アンケート調査の分析

第1節 調査の概要

第2節 結果とまとめ

第3節 まとめ

結章 本研究のまとめ

第1節 本研究のまとめ

第2節 受動文指導への提言

第3節 今後の課題

3. 各章のまとめ

3-1. 第1章

受動文習得に関する、一連の研究として注目されているものに、田中(1991,1996,1997,1996)の研究がある。本章では、一つの母語を対象とした、佐藤(1997)、田中(1991)、渡辺(1995)の研究を取り上げた。これら先行研究では、受動文の習得が母語の影響を受けることが多いこと、英語話者において受動文は非用という形で現れてくるが、インドネシア語話者や中国語話者では、受動文の過剰使用が多くなることなどを指摘している。

3-2. 第2章

この章では、日本語母語話者の受動文に対する正誤判断と、各場面における受動文使用の実態を明らかにすることを目的とした。調査に用いた調査用紙は、2部において構成した。1部の問題Iでは、18例の受動文{①直接受動文(無生物主語)}{②直接受動文(有生物主語)}{③間接受動文(持ち主)}{④間接受動文(第三者の受動)}{⑤受益}を示し、それぞれの受動文が自然か不自然かを選択させるものである。

2部の問題Ⅱ、Ⅲでは5つの場面を設定し、それぞれの絵を見て自由に文を作成してもらう方法をとった。

- 1) 18例中16例において、母語話者による自然・不自然の判断はほぼ一致していた。
- 3) 年齢別では、若年層と中年層の間に選択の差が見られる受動文があった。
- 4) 絵を見せて状況を示した問題Ⅱの場面から場面4までの内、場面3を除いた全ての場面で高い受動文使用率が見られた。
- 5) 場面3、場面4と同じ客観的な出来事を話す場合でも、受動文使用と能動文使用の二つに選択が分かれた。

3-2. 第3章

この章の目的は、研究の目的で既に述べたため、省略する。日本語母語話者に用いたものと同じ調査用紙を使い、トルコのC大学日本語学科に在籍する98名の学生を対象に、調査を行った。分析は、学習者を学年別、得点別に分けて行った。受動文正誤判断についての結果を以下に示す。

- 1) 学年、得点群を問わず判断が難しいものは{持ち主の受動文}(14)「私の頭が太郎に殴られました。」であった。
- 2) 学年、得点群を問わず判断が容易であったものは{直接受動文(無生物主語)}(1),(6),(11)であった。
- 3) 1年生、低得点群において利害の有無を判断する受動文の正誤判断が難しい。

学年、得点を問わず正誤判断の傾向が一致する受動文や、得点群の差によって、正誤判断の難易が決まってくる受動文もあった。

問題Ⅱと問題Ⅲの受動文使用の場面では、受動文をどれだけの学習者が使用できるかという、使

用能力を調査した。場面によって使用できる割合がかったよっていることが判明した。使用についての結果を以下に示す。

- 1) 場面(C)は、学年、得点群を問わず、受動文使用率が高かった。
- 2) 3年生はすべての場面において安定した使用率があったが、2年生はすべての場面において、使用率が低かった。
- 3) 場面3と場面4では、3年生を除いたすべての学年と、すべての得点群で場面4の使用率が有意に多かった。

受動文使用の際に、トルコ人日本語学習者に、6つの種類の誤用が見られた。場面によって誤用の数は違っており、特に1年生、2年生の低得点群に誤用者数と誤用数が目立った。本章では、学習者に頻繁に見られた2つの誤用を、学習の初期段階の誤りが、学習後半になってくると減少するもの(誤用タイプ1: {③動作主と被動作主の変換誤用})、学習暦が長くなっても、残っていくもの(誤用タイプ2: {②受動形の形態誤用})の2つのタイプに分類した。そして、これら誤用の要因を指摘し、結章でその要因を取り除くための受動文単元の指導方法を提言した。

4. 今後の課題

トルコ人日本語学習者は受動文の正誤判断を、どのような手段で行っているのか、また同じ環境で授業を受けているにもかかわらず、低得点、高得点といった個人能力の差がでてくるのはなぜかという疑問点を明らかにすることができなかった。今後、これらの疑問を明らかにするとともに、本研究で得たデータをもとに、より効果的な受動文単元の指導案を構築し、トルコの現場で実践していくことを、今後の課題としたい。